

アメリカン・ケース・スタディ

大橋宗夫

ジョージ・W・ブッシュ氏が、第43代アメリカ大統領に就任し、アメリカの21世紀が始まった。投票日からゴア氏が選挙の結果を認めるまでの激しい抗争の中で、アメリカ人でも知らなかったであろうアメリカの姿が現れて来た。外国人にとってアメリカを知るのは難しいが、今回の事件は色々なことを教えてくれた。

周知の通り、2000年のアメリカ大統領選挙は11月7日だった。同日には、連邦上院議員、下院議員のほか、投票者の属する州・郡・市町村等の自治体の首長・議員のほか幹部職員・検事・裁判官等の通常選挙が同時に行われた。大統領選挙は4年に1回、連邦議員の選挙は2年に1回。州以下の選挙はポストにより任期がまちまちなので、毎年11月の第1月曜日の翌日の火曜日の「選挙の日」に全国的に行われる。投票も大変だ。一枚の投票用紙に各種選挙の候補者名が記載され、これをマークする仕組みである。開票も機械を使わなければ不可能だ。この機械が問題をおこした。

大統領選挙は民主党のゴア副大統領と共和党のブッシュ・テキサス州知事との大接戦であったが、消費者運動で有名なラルフ・ネイダード、保守派のブキャナン等の獲得した票も4%程度あり、両候補の全国得票率はいずれも約48%で過半数は占めなかった。票差は30万（後に50万票になったと報じられている）でゴアが上回った。それでもブッシュが当選したのは、州を単位とするアメリカの連邦制の故である。州毎の最高得票者がその州に割り当てられた選挙人を全部獲得する。各州の選挙人の数は、その州の連邦上院・下院議員の合計である。下院議員の定数は435名で、10年毎の人口調査の結果により厳格な人口比で各州に配分されるが、上院議員は人口の如何にかかわらず各州2名。議員のいない首都ワシントンD.C.に割り当てられた3名を含め、選挙人は538名、過半数は270票。ブッシュの獲得数は271、ギリギリだった。人口の多い大州を制したゴアに対し、多くの小さな州で勝ったブッシュ。下院議員見合いの票ではゴアの225に対し、211。60票の上院議員見合いの選挙人がブッシュの当選を決めた。

南部の他の州では悠々と勝利をおさめたブッシュだったが、フロリダ州南半分には他州から移住して来た年金生活の高齢者が多く、ゴアの年金基金の危機打開の訴えが奏功し、ブッシュの弟が知事であるにもかかわらず、歴史に残る大接戦となった。両者とも 291 万票台で数百票差、正に一票の重みを感じる僅差である。当然、開票の点検 = 再計算を巡る争いとなる。ブッシュ陣営は、パンチ・カ - ドの機械による再点検で完了と主張し、ゴア陣営は手作業による見直しを求める。パンチ用の機械が古く、十分に穴の開かなかつた票を目で見直して読み取れば、黒人や老人等の不慣れな投票者の多いゴア票が増えるという期待である。州政府・議会は共和党支配、州最高裁は民主党前知事の指名した判事が多数という構造の中で、手作業を始めたり、中止したり、最後は連邦最高裁が登場して、12月12日午後10時、「有効・無効の判定基準を明確にせずに手作業による再計算を認めたフロリダ州最高裁の決定は、投票者の平等の保護に問題があり、合衆国憲法に違反する。手作業による再計算を認めるならば、十分な基準を定めるべきである。ところで、その再計算は12月12日中に終了しなければならない」という趣旨の判決を、これまた5対4の多数決で下した。ここでゴアが降り、12月13日、投票から5週間後にやっと次期大統領が決定した。

さて、ゴアは選挙結果を認めるに当たり、「世界の人々は、今回の争いをアメリカの弱点の表れと見てはならない。困難を克服することによって、アメリカ民主主義の強さが明確に示されたものだ」と述べている。我々は、強さと弱さの双方を知らされたのであろう。

最初に、アメリカとは何と大まかな国なのか。細部は不揃いでも、結果が納まればいいということか。投開票の実際は、州・郡ごとに定められるが、全国一律の基準はない。それぞれに出来上がったものを足し合わせて完了という次第。これは、基本的には多様性を包含したアメリカ社会の必然なのだろう。しかし、質の多様性は悩ましい。IT革命の一方で、民主主義の基礎である投開票の現場での旧式の穴開け機と読み取り機。操作する人間の能力もピンからキリまで、統一のしようもないのだろう。これは、アメリカ産業の品質管理上の問題ともなっている。にもかかわらず、これを統合して行くアメリカの力は何なのだろうか。分権の上の統合、差異を認めた上で統合を引っ張っているのは、アメリカという国家に対する国民共通の価値観で、これがアメリカの強さの根底にある。産業界では経営の技術なのであろう。

そうは言っても、今回の選挙に示されたのは、アメリカ国内の分裂の深さである。クリントン大統領のセクハラ疑惑、それを巡る弾劾裁判は、議会の共和党と民主党との党派的対立を尖鋭化した。大接戦の選挙とその後の抗争の残した傷を癒すのは容易ではあるまい。全国の得票、選挙人数、フロリダ州の得票、州最高裁の票決また連邦最高裁の票決、さらに50対50の上院、221対212の下院（2名は無所属）と、すべてが真っ二つに割れる。支持層の対立も明確である。大都市を中心とする北東部、中西部北部、太平洋岸諸州はゴアが抑え、ブッシュは南部、ミシシッピ・流域以西ロッキ・山脈に至る広大な地域、古き善きアメリカ、で勝った。男性はブッシュ、女性ではゴアが多数。教会に通う人々もブッシュ。白人ではブッシュ、マイノリティはゴア、特に黒人は圧倒的にゴアを支持した。黒人の反感は、フロリダ州でさらに増幅された。アメリカを二分する保守対リベラル、新対旧という思想的・社会的対立が鮮明である。根は深いものといわざるを得ない。

第三は、アメリカの裁判についてである。アメリカの裁判官は政治的に任命される。連邦最高裁の場合には、大統領が指名し、上院の承認を得て、任命する。僅か9名で任期も定年もないのだから、一人一人の任命がその後の判決動向に与える影響は極めて大きい。選挙期間中、大統領の最高裁判事の指名権者という役割がアメリカの将来に決定的意味を持つことが強調されていたが、ブッシュ大統領の下で、今後、アメリカの裁判の保守化が進むことになる。

アメリカ社会は、正当な手続きで定められた「ル・ル」を守ることによってこそ社会の秩序が維持できるという確信によって支えられている。誇張をおそれずにいえば、内容はどうあれというようにすら見える。開票を十分に尽くし、選挙民の意思を正確に知ることよりも、各州が選挙人を決定するという12月12日の「期限」を守ることの方が重要という最高裁の判決は、正にその好例となろう。大統領の就任は1月20日正午。これは憲法に規定されているが、12月12日は連邦法の定めである。選挙後の経過は、フロリダ州州務長官と連邦最高裁を握ったブッシュ陣営が、「期限」を楯に、時間稼ぎを繰り返し、やっと時間切れに持ち込んだということだろう。議論の結論が出たわけではない。しかし、これが「ル・ル」というのである。

今回の連邦最高裁の判決は、実質的にブッシュの当選を確定するものであっただけに、また、共和党政権時代に任命された裁判官が多かっただけに、政治的動機の存在を疑われ、初めに結論ありきの裁判だったと批判されている。再計算中止に納得しない市民運動家や報道機関による疑問票の点検作業

も行われる。大統領選挙の結果を速やかに決定すべきという高度の政治的配慮という面もあるが、ともかく司法に対する不信の傷が残された。

戦い終わって、ゴアは、「ここはアメリカだ」、新大統領の下に結束しようと支持者達に訴えた。ブッシュも、「自分は（共和党）一党にではなく、（アメリカという）国家に奉仕する為に選ばれた」とし、「癒し」の作業を始めるに当たって全国民の協力を要請した。その「癒し」の成否はブッシュの出方にかかる。ブッシュが強い共和党内の保守派との関係をどう構築していくか。選挙期間中は中道に訴える立場を取ったブッシュだが、保守派のサポートが、当選の大きな力となったことは疑いもない。1956年以来初めて、大統領、上下両院を握った共和党の保守派がこれを好機として、その旧来の主張の実現を求めてブッシュを縛れば、議会での党派的対立は深まる。2002年の改選期を控え、逆転を狙う民主党の徹底的な抗戦が予想される。ブッシュがいかにこれを避け、コンセンサスを確立していくのか。閣僚の人事等を見る限り、保守派の圧力の強さが感じられる。大統領がどちらになつても政策はあまり変わらないという大方の見方だったが、そうではあるまい。世界は、アメリカの変化を次第に実感するようになるだろう。日本も、「日本重視」と喜んでばかりはいられない。正念場だ。主体性を持った政治の対応が必要となるだろう。

ところで、ブッシュが選挙結果確定後初めてワシントン入りした際、真先に会談したのがグリーンズパンだったことは象徴的である。減速し始めた実体経済、下落を続ける株式市場。これがブッシュの直面する最大の課題であるが、大減税を柱とする政府の財政政策か、金融緩和の問題として連邦準備理事会に任せらるか。両方ともに追求するのが本音だろう。ブッシュが公約した一律大減税は、民主党が富者優遇として非難し、選挙戦最大の論点だった。勢力拮抗した議会で通るかどうか。ブッシュが本気で成立にこだわれば、議会審議の見通しが不明確の中で、連邦準備理事会は大減税実現の可能性を考慮しつつ金融緩和を進めなければならない。年明け早々の0.5%緊急利下げで第一步を踏み出しが、今後大きな負担となるのは間違いない。

NASDAQ株価の、意外ともいえる実体経済への影響。グリーンズパンの神通力に若干の疑念が生じつつあるこの時期に、ブッシュが連邦準備理事会とどう付き合って行くのだろうか。齟齬を生じないよう祈るのみである。

大減税とグリーンズパン。当分目の離せない状態が続く。

（1月5日記）（代表取締役理事長）